

峠崎洋介、広島県府中市出身（一九五〇年三月二十五日生まれ・五十五歳）。

中学生のころから外国で生きて行きたいと考え始めていた。特別な理由はない。明快なリズム感を持つラテン音楽に興味を抱いたためだろうか。明るさ、陽気さ、楽天性、そういうものを漠然と意識したのだろうか。

商船高校 商船大学が希望進路だった。しかし、父親の猛反対で普通高校に進む。何年間も中国大陆で転戦の毎日を余儀なくされていた父親は『家族と離れて暮らしてはならない』という信念で戦後を生きている。

反抗期の峠崎は父親の人生哲学に共鳴できなかった。大学進学受験勉強に身が入らない。一時は大学進学すら断念した。泣いて大学進学を勧める母親の姿に峠崎は再び受験勉強に取り組む。海外渡航の夢が捨て切れない峠崎は拓殖大学を目指した。

（あの大学には海外雄飛の歴史が色濃く残っているに違いない）

峠崎は大学で英語に打ち込む。英検にも合格した。英語の通用する国でラテン的（スペイン風）気質を残しているのはフィリピンだ。

一

そのころのフィリピンは反日感情が強く、日本人在住者は少なかった。それも峠崎の決断に影響した。かえって日本人の進出する可能性が広いのではないか。

二

何しろ資金が必要だ。広島からの仕送りは、一カ月一万円。ラーメン屋のアルバイトが三万円。こつこつと預金した。育英会の奨学金支給も受けた。

下見に行かなければ……。

大学三年生の春休みに渡比する。船への憧れと旅費節減と、峠崎は貨物船に乗る。横浜を出港して六日後にマニラの土を踏む。うろつろと何日か歩き回るうちに、たちまち財布の中身が心細くなる。

（腹が減った、安い飯屋はないかな）

そんな峠崎が幸運にも東京の空手道場の大先輩を路上で発見する。先輩はマニラ空手道場の主席師範をしていた。この道場の片隅に峠崎は居候する。

峠崎に模索の毎日が続く。（何かないか）。峠崎は在比日本大使館を訪ねた。そこで日本文化センター日本語教室女性講師の藤本と知り合う。峠崎は夜間講座の傍聴に通う。

「世界的な傾向で日本語教師が不足しています。興味がありましたら日本で勉強してみ

ませんか」

日本国内の日本語教師養成機関を藤本が教えてくれた。

（そうか、一生懸命に勉強したら俺にも出来るかも知れないな。フィリピンで生きる道となりそうな気がするぞ）

日本に帰国した峠崎の決意は揺るがない。

ちょうど峠崎の大学でも一年間の日本語教師養成夜間講座が始められた。峠崎は第一期生となる。外国人留学生に日本語を教える別科も設置された。そこにも峠崎は籍を置く。夏休みには文化庁が開講する現職日本語教師研修講座にも出席した。マニラで藤本が教えてくれたものだ。希望者が多く選考試験が行われた。論文を含む筆記試験に合格した峠崎は面接で『現職教師』でない点が問題とされた。マニラでの経験が役立った。試験官の一人が藤本の知人で、これも幸いした。二十五人の受講者のうち現職でない者は、峠崎だけだった。

講義は懸命にノートした。休み時間は受講者たちの雑談に目を見張った。現実に外国人子女を前に悪戦苦闘している教師たちだ。一緒に昼食を摂るようになった。先輩外国語教

三

師』の腰巾着よろしく峠崎は教壇の経験を吸収した。その中の一人（札幌で教鞭を執っているY氏）とは今でも交友関係を大事にしている。

四

大学卒業と同時に父母の反対を押し切っても渡比したいという峠崎の決意は不動だったが、『不安などなかった』と言えば嘘になる。いや、本当のところは動揺する心を周囲に隠していた。そんな峠崎を励ましたのは同年代の者たちが示す尊敬にも近い羨望だった。

渡航前夜、同級生や後輩が集まって饞はなみすの会を催してくれた。

「本当は俺も行きたいんだあ……」

仲間がため息をつく。一緒に日本語教師養成講座を受けていた女子同級生が挨拶に来る

「いつか私も必ず峠崎さんの後を追っかけます。後輩のために道を切り拓ひらいて下さい」
その席で峠崎の迷いが完全に消える。

（おめおめと半端な成果では戻れないぞ）

峠崎は渡航方法で迷っていた。それについて挨拶の中で峠崎は触れた。

「船で渡航したいのですが、いま日本の港湾労働者は歴史的な大規模ストライキ中です。

外国航路は閉鎖されていますけれども、沖縄までなら船で行けるようです。返還された沖縄を見ておきたいという気持ちもあります。とりあえず明日の船で沖縄へ向けて晴海埠頭を発ちます」

翌早朝、昨夜の会合出席者だけでなく、その何倍も埠頭まで見送りに来てくれた。峠崎はデッキの上で溢れる涙に困った。

（俺に出来るか分かりませんが『フィリピンで生きたい』この思いは必ず貫きます）
見送りの人々に峠崎は胸の中で叫んだ。

マニラ港に降り立った峠崎は、やむなくと言うしかないのだが、まずは空手道場佐々木大先輩の厄介になり道場の片隅に寝起きさせてもらおう。

二時間で洗濯物は乾く。ココナツ椰子の実が一つあれば渴きは癒せる。無料ではないものの限りなく安いバナナで飢えが凌げる。

（貧しさにひるみさえしなければ『フィリピンで生きたい』という俺の思いは満たせるぞ）
不敵な自信のようなものが峠崎の中に湧き出す。覚悟が据わった。

ある日、道端の露店で売っている銅鑼焼き状の食べ物に峠崎は興味を持った。安いので注文してみた。焼き上がったものを口にして峠崎は驚く。

（もしかしたら、これが、ハンバーガーという食べ物かも知れない）

好奇心^{あつちゆ}とした露店の主^{あま}が峠崎の質問に答えてくれた。やはり、ハンバーガーだった。峠崎が日本を離れた五年後、一九七七年、銀座にハンバーガー専門の一号店がお目見えしている。テレビアニメ『ポパイ』で背の低い太った愛嬌のある男が食べているハンバーガーに子供のころ峠崎は憧れていた。他の日本人と同様に峠崎はハンバーガーを食べていない。それが、マニラの街角で焼かれているではないか。

（日本にないものがマニラには沢山あるらしい。この地を選択した俺の未来は明るいぞ）
単純かも知れないがハンバーガーを口に押し込む峠崎の胸を満足感が過ぎる。

日本を発つ前、峠崎は兄の愛情に泣かされている。弟のフィリピン移住決意^{しんげ}が翻せない^{ひんげ}と知った兄がリンガフォンSP盤を届けてくれた。

「俺の英語学習は挫折したが、この盤を形見と思って頑張れよ」

マニラに向かう日まで峠崎は兄の盤で英語を学んでいる。

勉強に疲れたとき聴いていたカーペンターズ兄妹の歌がマニラの街角を流れているでは

ないか。懐かしい。練馬の安アパートが目につかぶ。異国に移住する寂しさが薄れて行く。藤本が道場に近いサント・トーマス大学に推薦してくれた。ここでは教育学部大学院が第三外国語として日本語とドイツ語とを開講していた。

教師の時間給はフィリピンの法定最低賃金を僅かに越える程度で、土曜日に一回の授業では下宿にも移れない。

そのころ峠崎は熱病に罹患した。病院前の急坂を佐々木道場主が峠崎を背負って登る。もはや峠崎にとって佐々木大先輩は命の恩人でもある。

その後、空手道場の伝で民間日本語学校に紹介された。そこはマニラホテル別館の教室という豪華版で、週三回の時間給も高額だった。峠崎は周囲の厚意に支えられて間借り生活に移る。

日本語教室でフィリピン人学生たちは積極的に質問する。特に女子学生が熱心なので新米教師峠崎は押しまくられる。

「一本、二本、三本、四本、このとき、どうして『ほん』でなく『ぼん』や『ぼん』になるのですか」

「こういう疑問に日本の『国語』教師は直面しない。しかし、外国人と向き合う『日本語』

七

教師にとっては避けて通れない課題である。毎日、峠崎は睡眠時間も詰めて下調べに集中する。

八

サント・トーマス大学では十三人の学生に教えていた。大学院なので社会人の復学者もいる。五十歳に近い婦人が痛烈な質問を浴びせた。

「戦争中、私たちは日本軍の兵士に絶えず『おい、こら』と怒鳴られました。これは、どういう意味の言葉なのですか」

二十二歳の峠崎には縁の薄い言葉だが、答えなければならない。

「それは、相手を見下した品位の低い言葉でして、なるべくなら使わない方がいいのです。今後、私が教える日本語には含まれない言葉です」

答えながら峠崎は背筋を冷や汗が流れる思いだった。戦争の傷痕は目に見えない部分の方が大きい。

この年は、マニラを集中豪雨が襲い、サント・トーマス大学付近の道路は冠水してしまう。教科書やノートを抱えた峠崎が、膝まで没する道路を用心深く歩いていたら民家の二階で何人かが薄ら笑いを浮かべ眺めている。次の瞬間、峠崎は道路の穴に転落してしまっ

た。大事な教授資料が泥水に投げ出され甚大な被害を受ける。

「穴がある、気を付ける」

なぜ、一声かけてくれないのか。

(俺が日本人と知っての対応か……)

マニラ人(都会人)の一端を峠崎は垣間見る思いだった。

民間日本語学校に美人学生がいた。若い峠崎は大いに関心を抱く。フィリピン人にはスペイン人(あるいはアメリカ人)との混血と思える女性がいる。この学生は、ぱっちりした大きな眼をしていて、湖のような青く深い瞳が魅力的だった。フィリピン人の多くは人種的に言くとマレー系だ。脚が長い。腰の位置は高い。それだけなら欧米人と同じ表現になる。足首が違うのだ。極度に括れた足首を見かける。欧米人はゴールデンレッグスだが、フィリピン人はダイヤモンドレッグスだ。

まさに彼女の脚が、それだった。唇には気品さえ漂っていた。

この学生が一目で八九三と分かる男と一緒に車を降りて来た。

「女房がお世話になってます」

峠崎は喉が詰まって挨拶に困った。

「日ごろのお礼です」と日本料亭『玉屋』に案内された。まだ日本料亭の数が少ない当

九

一〇

時だ。久し振りの日本料理なのだが、峠崎は味を覚えていない。

その食事中に、これまた一見して『ちんぴら八九三』と分かる小柄な男が入って来た。

「兄貴、いま頭に来てるんです。拳銃を貸して下さい」

「こんな所で何を言っ」

ちんぴらの頭を割り箸で兄貴が叩く。ますます峠崎は喉が涸れる。

日本語教師には生きがいも誇りも持っていたが、その後、八九三夫人への授業には何となく落ち着きの悪いものがある。もちろん峠崎の心中は誰も知らない。八九三夫人に対しての失望とか落胆とか、そういうものとも違う。

そんなとき、峠崎に思いがけない話がある。もともと、マニラの日本人社会は狭い。まして、若い日本人男性は少なかった。

B 観光産業

マニラヒルトンホテルの日本担当営業支配人（古賀）は、新しい仕事をバンコクで始める段取りになっていた。普通の場合、後継者は東京ヒルトンホテルで派遣する。しかし、古賀は峠崎を推薦した。

『ジャパゆき』などという言葉が生まれる前、日本列島の若い女性がフィリピン人男性バンドマンに憧れる姿を見かけた。バンドマンの後を追ってフィリピンに渡る行動的なケースもあつた。ベトナム戦争で沖繩に駐留したフィリピン人軍属と結婚する日本人女性が珍しくなかつた。そんな時代の話なのだ。

「おまえ、ネクタイを持っているか」

唐突な古賀の尋ねだつた。峠崎は正直に答える。

「いえ」

「Yシャツは……」

「持ってます」

「じゃ、ネクタイは俺のを貸す」

「何が始まるのですか」

「マニラヒルトンホテルの採用試験だ。おまえが受験するんだ」

「ぼくには日本語学校があります」

一一

「両立させる」

一二

古賀は面接試験について答弁要領を丁寧に教える。

（民間日本語学校は三方月契約だ。今月で契約が切れる。八九三夫人の顔を見なくて済む職場へ行きたい。サント・トーマス大学の教育課程は一年間だ。しかし、土曜日だけの授業だ。両立可能だな）

面接試験の中心人物は総支配人（オランダ人）だったが、峠崎に第一順位を付けた。

かくして峠崎はマニラヒルトンホテル日本人担当営業主任となる。香港ヒルトンホテルで半月、東京ヒルトンホテルで半月、峠崎は研修を受ける。

マニラ市内の日系企業、商社、日本人会、在比日本大使館、こついう所を回って予約紹介を受けるのが峠崎の仕事だつた。

いまを遡る三十数年前だ。ぼちぼち日本人団体観光客が、マニラに来るようになりつつあった。日本人団体観光客はホテルにとってドル箱だ。日本の旅行代理店マニラ支店は峠が顔を出す大事な場所となる。しかし、ドル箱であっても日本人団体観光客はトラブルメーカーでもある。

マツサージ女性と日本人観光客とが揉めた。営業担当の峠崎は客室に入れないのだが、客室担当は言葉が通じないし、深夜でもあるし、峠崎に助けを求める。本来、ホテルは関知しない性質の出来事であるけれども、それでは日本人客に気の毒だ。事件の経緯は次の通りである。

マツサージ嬢のサービスが彼自身に及び、男性のシンボルが自己主張する。素早くマツサージ嬢が行為を開始する。終了後、日本人客はマツサージ料金しか支払わない。

「俺の方で要求したのではない。向こうが勝手に楽しんだのだ」

ここではマツサージ嬢も引き下がれないというものだ。『特別サービス料金を加算して下さい』となる。団体客なので添乗員まで巻き添えにされる。

後日、添乗員が峠崎を評価した。

「法律を持ち出すまでもなく売春買春は人間として許せないのですが、ぎりぎりのところで生きているマツサージ女性の窮地にも配慮した大岡越前守なみの名判決でした」
何が縁になるか分からぬもので、この添乗員が峠崎と長い付き合いになる。

ホテルのフロントには『日本円』を換金する日本人団体客が長蛇の列を作る。スローな

一三

紙幣の扱いに日本人客が怒り出す。見かねた峠崎がフロントに入り手伝う。日本人客は大喜びだ。しかし、フロントスタッフが納まらない。

一四

「なにさ、外回りの新参者が……誰の許可を得てフロントに入ったのですか」

副総支配人（ドイツ人）が事態收拾に乗り出す。いきなり峠崎はフロント副支配人に抜擢される。十年勤務者を飛び越しての三階級特進だ。

（日本人は、ドイツ人と同じような資質を持っている）

副総支配人は峠崎の仕事ぶりを見ていた。

『このポストならフロントに入っても文句ないでしょう』とドイツ人が肩をすくめる。

半年後にはマニラヒルトンホテル幹部会議の議長も任される。先輩たちの嫉妬、意地悪、これは、どこの世界も同じだ。そんなものに峠崎は付き合っていられない。

(ヒルトンホテルは名門なのだ。ロビーを徘徊する『ぼん引き』を一掃するぞ)

ベルボーイ、セキュリティ、すべての従業員に『ぼん引き』締め出しを指示する。『殺されますよ』と心配してくれる女性スタッフがいた。その通りで、峠崎の部屋まで来て拳銃を手に凄む『ぼん引き』もいる。

「ミスター・トウゲザキ、日本にいる両親の顔が見られなくなってもいいのか」

峠崎は、その男の自宅を訪ねた。ベニヤ板と黒いトタンとで囲った家には父親、母親、五人の弟妹が肩を寄せ合って暮らしている。父親は視力障害者だ。

「何か真面目な職業を紹介してやる、それまではホテルロビーで目立たぬようにしなさい」この『ぼん引き』とも峠崎は長く付き合うようになる。

二年後、ドイツ人副総支配人がニューヨーク本部勤務となり、峠崎が後継者に選ばれる。しかし、その地位を継承するためには、アメリカのカーネル大学ホテル学科に半年間、寮生活で留学しなければならぬ。しかも、その後は世界中のヒルトンホテルを転々とする人生を送るのだ。

(それは困る。俺はフィリピンで生きてたくて父母の願いに背を向け日本と決別したのだ) もう一つ、フィリピンには峠崎を引き留めるものがあつた。『ぼん引き』掃討作戦展開時に『殺されます』と心配してくれたホテルフロント女性スタッフだ。仕事が出る。頭脳明晰だ。よく気が付く。フィリピン人にしては色白で顔立ちも日本人に似ている。

(いますぐ彼女に会いたい)

一五

突然、峠崎を揺り動かす激情が襲つた。

一六

その数日後、マッサージ嬢と日本人客とのトラブルで知り合った添乗員が峠崎を呼ぶ。お互いに忙しい稼業だ。立ち話だった。

「団体旅行客が激増しています。マニラに当社の支店を出します。つきましては峠崎さんに支店長を引き受けて頂きたいのです」

フィリピンに留まる。これが峠崎の譲れぬ一線だ。

日本の旅行会社のマニラ代理店(ツアーオペレーター)なら引き受けてもいい。市内観光バスの手配、ホテル宿泊予約、いままでの経験が全部そのまま役立つ。

この仕事で峠崎は多くの人脈を手にする。畑和崎玉県知事の『青年の船』団長としての来比も峠崎の旅行代理店が受けた。知事の食事には埼玉県総務部長らと同席した。鶴田浩二の撮影隊もアレンジした。生バンド演奏をバックに片手を耳に、片手にマイクという彼独特のポーズも目の当たりにした。

六年間、仕事は順調だった。しかし、日本の本社からの送金が止まってしまった。社長の資金流用が焦げ付いたらしい。バス会社、レストラン、ホテル、これらに小切手を出している。大金だ。支払わなければ刑事事件になる。刑務所すら覚悟しなければならない。すでに結婚していた峠崎は思い切つて妻に相談した。

「あなたは若いのです。やり直し出来ます。干魚一匹の食事でも私は我慢します」
ホテルフロント当時の手際で彼女は彼女名義の土地家屋を売却して峠崎の窮地を救う。

峠崎は一社員としてY商事に勤める。ここは旅行代理店時代に知り合った。建築機械などをフィリピンに輸出していた。

ここでも峠崎は人脈を生かして業績を伸ばす。やがてY商事は峠崎をマニラ支店長に任命する。四年間なのだが、Y商事マニラ支店は順調に業務を展開した。

そのときだった。
ニノイ・アキノ暗殺に端を発した政局混乱が襲う。フィリピン経済は、どん底となる。
(輸入が駄目なら輸出だ。何かないか)
峠崎の決断は速い。

「ラタン家具がいい、それに付随する日用品も対象にしよう」

一一八七

フィリピン全土を峠崎は駆け回った。

毎週、四十フィートコンテナを七、八本も輸出するまでに業績は成長した。しかし、日本の本社が経営不振に陥りマニラ支店は閉鎖される。現地採用の峠崎には退職金などない。それでも峠崎には七転び八起きの精神力が備わっていた。若さもあった。

このまま終わっては日本の顧客が困る。フィリピン家具・日用品で営業して来た日本サイドの専門業者がお手上げになる。『何とか続けて下さい』という顧客の強い要望を受けて立つ形で峠崎は自立営業を決意した。

〔 籠を作る 〕

以前から峠崎は街角の民芸品に注目していた。フィリピン人は手先が器用だ。人件費も安い。峠崎の父親は画家だった。知らず知らずのうちなのだろうが峠崎には審美眼が育っていた。

モンテンルパ町で民芸品生産工場を経営していたフィリピン人が工場を売りに出した。儲からないのだ。それを峠崎は従業員ぐるみ譲り受けた。さいわい日本の顧客が二人も峠崎支援の声を掛けてくれた。資金返済計画も作成した。

とうとう峠崎は民芸品工場を立ち上げた。会社組織づくりに峠崎夫人が活躍する。特に社員雇用分野で夫人は貴重な存在となる。

峠崎は民芸品に実用性を付与する試みで新天地を開拓しようとしていた。まだ日本には籐（ラタン）ブームが残っていた。従来は籐椅子が主力だったけれども、峠崎は新製品を模索する。日本は核家族化が進んでいた。一人で暮らす若い男女も増えていた。

（ラタンの小物入れだ！）

試行錯誤の末、五段組み収納家具に辿り着いた。木材は使わない。ラタンだけの製品化には技術的な困難が伴う。頼るのは職人たちだ。峠崎浮沈の鍵を握っている者は職人なのだ。五段収納家具には、下着・靴下・ハンカチ、なんでも入る。おしゃれ感覚に訴えたいと売れない。

これが日本でヒットした。年間、三万個〜五万個も納品した。五段箱は大きさも形も種々のものに増える。塗装を峠崎は拒絶した。せつかくの自然素材だ。フィリピン各地を奔走して、峠崎の審美眼に適った素材を集めている。ラタン、砂糖黍、ニッパ椰子、ココナツ椰子、ブリ（椰子の一種）、アバカ（マニラ麻）、峠崎の素材は業界常識を覆す。塗装

一九

二〇

製品の多かった業界に峠崎の自然素材作品が新風を吹き込む。日本の消費者は峠崎製品の新鮮さと健康志向に魅かれた。

峠崎が原材料を買い付ける相手の多くは貧しい農民だ。一ペソでも高く支払いたい。しかし、中古車で田舎の悪路を走り回る峠崎自身にも金銭的な余裕がなかった。一ペソでも安く良い原材料を仕入れたい。ブリを束ねて車に積み込む峠崎を手助けしてくれる親切な農民に僅かな心付けを手渡すようにした。その心付けに農民と奥さんとが何度も頭を下げる。

（この農民たちのためにも日本で反響を呼ぶ斬新な製品を作らなければ……）

峠崎の胸は熱くなる。

新しい人生を賭けた峠崎の民芸品工場には活気が満ちていた。峠崎の製品は民芸品と言っよりも民芸調生活用品となる。

製品と同時に峠崎が重視したのは日本の出資者（顧客）への返済だった。

（返済予定は厳守しなければならない。それが峠崎製品の売れ行きを支えるのだ。もともと業界は狭い。風評が命取りにもなるし、製品価格の急騰にも繋がる）

次に峠崎が投資したのは職人たちだった。職人ばかりではない。梱包担当、運送関係、コンテナ積み込み、スタッフの総力が峠崎を助けている。船積みは深夜に及ぶ。ときには南国マニラの空が白むまで苛酷な作業が続く。前のフィリピン人経営者も従業員への飲食には配慮していた。しかし、フィリピンの相場ではパンデサル（コッペパン）とインスタントコーヒーが当たり前だった。峠崎はジョリビー（マクドナルドのフィリピン版）セツトメニューにした。五十人を越える従業員全員では馬鹿にならない金額だが、こういう所を吝嗇^けっては事業の急進展が期待できない。フィリピン人が大好きなコココーラ、ハンバーガー、フレンチポテトフライ、従業員は目を見張る。食後、従業員代表三人が峠崎の部屋まで来て頭を下げる。

「皆、大喜びです。こんな御馳走は初めてです」

「ジョリビーの献立をガラス窓から見ているようですが、食べた経験はなかったのです」

「いつ、次の残業になりますか？ 徹夜でも構いません」

峠崎は胸が熱くなる。

「いまの日本の反応が続けば、半月ごとでも御馳走できるよ。クリスマスにはボーナスも弾む」

「社長、ボーナスよりもレチョン（豚の丸焼き）にして下さい。一度、食べてみたかっ

一一一

たのです」

一一二

「分かったよ、両方とも出す」

上り坂の峠崎に日本のガーディニングブームが追い風となる。日本で峠崎作品ファンが定着しつつあった。

庭作りには小物が際限なく必要になる。しかし、種類が多くて大量生産にならない。ますます職人の手作業が頼りとなる。大量生産では中国に敵わない。ベトナムも強敵となりつつある。フィリピンの生きる道は職人たちが先天的に持っているデザイン感覚と手先の器用さなのだ。

原材料の買い付けで田舎を走っていた峠崎は零細加工業者の製品に目を留めた。こんな

感覚の製品は峠の工場でも作った経験がない。技術も確かだ。この製品を買い付けて日本へ輸出できないか。しかし、コンテナに積み込むほどの量産を零細加工業者に発注しても無理だ。地方の業者は先払い（現金買い付け）なので峠は安易に発注できない。出稼ぎの形で零細加工業者に峠工場まで来てもらう。工場の先輩職人と並ぶ給与を峠は提示した。給与の額面に喜んで業者が峠に同意する。ところが横で聞いていた奥さんが心配する。

「寝るところはあるかね、食事は……」

「大丈夫だ、工場の職人たちが寝ているところに一緒にいいだろう。食事は自炊だ」

峠は丁寧に根気よく説明を続ける。

（いい職人を確保しなければ事業の伸展は期待できない）

これが峠の偽らざる気持ちだった。

子供用三輪車を模して製作した木造三輪車が次のヒット商品になった。サドル部分に鉢物を載せる工夫が施してある。鉢物のカバーも自然素材で造った。

従業員全員の『やる気』を引き出すにしても核になる人材を育てなければならぬ。腕のいい職人でも周囲への配慮に欠ける場合がある。腕がよくて目配りの利く人物は少ないものだ。そうした職人であっても金銭に触らせると失敗する。従業員の舵取りは日本以上に難しい。右腕だけでなく左腕も採用し、両者の相互研磨に期待する。

右腕には工場内の生産管理を任せた。左腕は外回り専門とした。峠の工場はモンテンルパにある。ここにはフィリピン最大の刑務所がある。この刑務所の服役囚が峠作品を支えている。峠と刑務所との関わりは何十年も遡る。

モンテンルパは日本人にとって悲痛な歴史を刻んだ地名だ。

一一三

一一四

六十年前は緑豊かで緩やかな丘陵だった。

モンテンルパ日本人記念公園と世界平和祈念之塔とが昭和五十六年八月に完成している。その中にある『平和観音』の前には、この地で絞首刑となった戦犯処刑者十七人の墓標がある。

ときおり公園内の『平和の鐘』が響き渡る。

敗戦で俘囚の身となった日本軍兵士は、この地に幽閉され、かつ処刑された。日本人墓地がある。十数基の慰霊碑がある。犠牲者が多かった県の碑、生存した兵士が建立した部隊名を刻んだ碑、個人名の碑、これらの慰霊碑にはフィリピン人の墓守りがある。

この墓守りへ定期的に援助を続ける日本人団体もある。その団体の中には『渡辺はま子』もいた。

『モンテンルパの夜は更けて』は彼女によって大ヒット曲となった。

日本の旅行代理店マニラ支店長をしていたころ、峠崎は、渡辺はま子に墓守りへの橋渡しを依頼された。墓守りで銀行口座を持っている者は少ない。フィリピンの銀行は墓守りのような下層庶民に口座を作ってくれないようだ。日本から峠崎へ送金して墓守りに届けてもらふ。一度に大金を渡すと問題が起こる。そのへんの呼吸は峠崎に任された。

いまのモンテンルパはニュー・ビレッジ・プリズンと呼ばれるフィリピン最大の刑務所として有名だ。約三千人の重刑服役囚が収容されている。

峠崎の左腕として活躍しているスタッフがモンテンルパ刑務所へ毎週のように通う。工場で造られた骨組みを何十人かの囚人が籠に編み上げる。何がしかの収入で潤うのは囚人だけでない。看守も手数料に有り付ける。モンテンルパと峠崎との縁は深い。

モンテンルパ刑務所は刑の程度によって囚人を幾つかの棟に分けている。峠崎が発注している棟は比較的短期服役の囚人を集めていた。せっかく峠崎製品作製技術を習得しても出所後の囚人は峠崎工場に来てくれない。長期服役棟へ発注できないか。ときたま峠崎から心付けを渡されている管理人が好意的な提案をしてくれた。

「コンクリートの床を作り、屋根を乗せれば受け入れても宜しい」

峠崎は飛びついた。ところが管理人も強^{シカ}がな役人だ。

「セメント代金、屋根を架ける経費は俺が預かる」

そんな手に乗ったら峠崎は被害者となってしまう。

二五

「建築業者に知人がいます。床と屋根は私の方で作ります」

いまは辛抱強く折衝を重ねるしかない段階だ。

二六

峠崎工場の従業員給与は同業他社に比べて割高だ。右腕、左腕、このスタッフには相場
の二倍、三倍でも惜しみなく峠崎は支払う。

生産面での人材配置と同時に経理担当秘書の役割が重要である。従業員への給与支払いで細工をされる日本人経営者が多い。身内に任せても妻が怪しいのでは何ともならない。事業に失敗し日本撤退を余儀なくされるケースには、妻や右腕に裏切られる例を見受ける。

金銭目当てで結婚した妻は信頼できない。その点、職場での仕事を通して貧しい峠崎と結ばれた夫人なら安心というものだ。右腕に金銭を預けてはならない。この鉄則を踏み外した日本人が破産する。

戦後、フィリピンで一旗揚げようと渡航した一匹狼の日本人は、何十万人と言われていた。そして、一旗揚げた者はゼロなのだ。せめて地方の長者番付でもいい、日本に戻って名を連ねた人物がいたら教えて頂きたいものだ。フィリピンで破産した日本人は数え切れない。多くは妻（その一族）や右腕に食われている。

ところで、峠崎秘書は夫人の実妹だ。妻の身内に裏切られるとしたら峠崎も倒産している。『内助の功』とは峠崎夫人のためにある言葉のようだ。この秘書は材料買い付け時の二重伝票を徹底的にチェックしている。なにしろ、従業員の二重請求など当たり前になっているお国柄だ。これが食い止められれば会社の収益は大幅に伸びる。二重伝票が発覚した従業員は辞める（逃亡する）ので、峠崎の会社は良質な従業員を確保できる。

日本から自然素材の峠崎製品に注文が入っても、ベルトコンベアー方式で大量生産できない仕事なのだ。職人の人数を増やして解決する性質の商品生産ではない。職人の腕を確かなものに育ててこそ作品の水準が向上し、数量も増える。

しかし、峠崎が仕事運に恵まれているとは言えないようだ。二〇〇二年七月～八月にかけて悪天候が続く。二月も太陽が顔を見せてくれなかった。これほどの異常気象は三十年もマニラに住んでいる峠崎にとっても初めての経験である。コンテナ積み込み直前の完成品が黴カビてしまい何万个も焼却処分せざるを得なくなった。虫が異常発生し日本の業者倉庫は飛び交う成虫で覆われてしまう。そのような事態に峠崎は責任を取らされた。

二七

資金繰りも日本の仕組みと違う。貧しい農民が揃えた材料は現金買い付けだ。これは分かる。ところが何十人も従業員を抱えた下請け業者製品も現金支払いなのだ。下請け先が数社になると前払いの金額も大きい。峠崎が日本へ出荷する場合、日本に前払い契約はないので、何カ月か後でないと入金にならないではないか。常に相当な額の運転資金が必要なのだ。おまけに従業員の給与は毎週土曜日払いなので『えっ、もう明日は給料日か』と気ぜわしい。

二八

さらに日本人が理解し難いのは従業員の寝泊まりだ。部屋も寝具も経営者が負担する。そうしなければ腕のいい職人は確保できない。台風で壊された屋根の修理代金が経営者の

資金繰りを狂わせる。

そんなこんなで、いつになっても物作りに携わる男の苦闘は続く。